

システム情報工学研究科修士論文概要

年 度	平成 23 年度	学位名	修士(工学)
専 攻	知能機能システム	専攻	著者氏名 鈴木 敬文
指導教員氏名 宇津呂 武仁			
論文題目 日本語機能表現の解析における代表・派生関係の有効性の評価			
論文概要 <p>日本語には、(1)「出発するにあたって、荷物をチェックした。」の「にあたって」や(2)「ボールは壁にあたって、跳ね返った。」の「にあたって」のように、同一表記でも異なる働きをする表現がある。(1)の「にあたって」は機能的用法として働いており、機能表現と呼ばれている。機能表現の持つ表記は機能的用法として出現している場合と、(2)の「にあたって」のように内容的用法として出現している場合を区別する必要がある。本論文では、大規模階層辞書である日本語機能表現一覧(「つつじ」)に収録されている、約17,000種類の機能表現を対象として、機能表現表記の用法判定方式を提案する。これまでの研究では、数百の規模を対象にした用法判定方式が提案されてきた。この方式では、自動判定ツールのために各表現あたり50例の訓練用例が必要となり、本論文で対象としている「つつじ」の全表現に対してその規模の用例を収集するのは現実的ではない。</p> <p>そこで、本論文では、「つつじ」の階層性を利用し、階層において下位に位置する派生的表現の用法判定に際して、用法が類似するより上位の代表的表現の用例を参照することで用法判定を行う手法について述べる。本論文では特に前後の形態素の品詞が代表・派生間において不変の場合には、代表的表現と派生的表現の間で用法の傾向に相関がある、という特徴を利用し、派生的表現の用法判定の際に前後の形態素品詞が一致する代表的表現の用法判定済み用例を参照することでその用法判定を行う。この方式に基づいて、派生的表現の用法の分析を行った結果、代表的表現の表記の用法判定済み用例集合(約38,000例)を参照して、派生的表現の表記の用法判定を行うことにより、85%程度のF値で正しく判定できることが分かった。さらに、「つつじ」に記述されている左・右接続規則を一部改変した規則を併用することにより、用法判定の精度が改善できることを示す。</p>			
審査日 平成 24年 1月 30日			
審査員	(大学名 職名)	(学位)	(氏名)
主査	筑波大学 准教授	博士(工学)	宇津呂 武仁
副査	筑波大学 教授	工学博士	丸山 勉
副査	筑波大学 准教授	博士(工学)	矢野 博明